



「アウトグループ」という発想ーチンパンジーのじゃんけんー

校長 三村 孝志

8月11日(金)の新潟日報に、チンパンジーがじゃんけんを理解できるようになることを、京都大学のチームが明らかにしたという記事が掲載されました。実験では、「グーとチョキ」「チョキとパー」「パーとグー」の3種類の画像のいずれかを示し、勝った方を選べば、リンゴなどがもらえるようにして、じゃんけんの規則性をチンパンジーに学習させました。1日に140回、約100日続けた結果、5頭がほぼ全問正解できるようになったそうです。人間でも同様の実験をした結果と比較し、チンパンジーには、人間の4歳児と同じくらいの理解力があると判断しました。興味深い実験です。

実験に取り組んだのは、京都大学の松沢哲郎先生です。京都大学の霊長類研究所のホームページには「チンパンジーの研究を通じて人間の心や行動の進化的起源を探り、「比較認知科学」とよばれる新しい研究領域を開拓した」とあります。「比較認知科学」という新しい研究領域の開拓者なのです。「人間の心や行動の進化的起源」を探るといって研究、わくわくしませんか。研究概要には「人間と動物という二分法を超えて、人間とそれ以外の動物をひとつのつながりとして捉える新しい人間観を実証的に提示した」とあります。

早稲田大学の石原千秋先生は「二項対立は思考の基本である」と述べています。先ほどの引用では、二分法と重なるでしょう。まずきちんと考えるためには、二項対立を使った思考方法を身につけなければなりません。その方法を身につけなければ、次の段階に進めないからです。専門的な領域のことは、私にはよくわかりませんが、人間と動物という概念を用い、単純に比較し、ここが違う、ここは同じという現象的な比較をするだけではなく、松沢先生は、人間と動物を連続性においてとらえようとしていると思われます。

ある講演では「アウトグループ」という発想について説明されています。それは「対象を外から眺めたほうが、かえってその本質に近づきやすい」という発想のことです。日本を深く知りたければ、外国に行くことが手っ取り早いように、「人間とは何か?」という問いに答えるために、「人間のアウトグループに目を向ければ人間の本質が理解できるのではないか」という発想から、松沢先生はチンパンジーを研究しているのだそうです。人間のアウトグループにはチンパンジー、ゴリラ、オランウータンがいます。

松沢先生は次のように述べています。

「アウトグループ」という発想はどんなお仕事にも適用できます。あえて自分の抱えている眼前の問題の外側に目を向け、そこにあるものを理解することで、かえって自分の抱えている問題の本質が見えてくるのではないのでしょうか。

問題について、いろいろ考えみても、展望が開けないときには有効でないかと思われます。私たちの、そしてみなさんの前には、様々な問題があります。定期テストの問題は、先生が答えを知っているから、先生に聞けばいいかもしれません。しかし、自分はどう生きるかとかこれからの社会をどう構想すればよいかなどの問題は、正解を誰かが知っているわけではありません。二項対立的思考方法を身につけ、「アウトグループ」などの発想を駆使しながら、考え抜くことでしか答えを見いだせない問題です。素朴な問いは、別の面から考えると根本的な問いであることも少なくありません。社会や人生や自然に対する自分の疑問を大切にしてください。

考えるとは、何か(問題)について、考えることです。定期テストでは、解くべき問題を先生が示します。しかし、考えるに値する問いを自分で設定する力、問題を設定する力も考える力なのです。